

中つ巻 応神天皇

一、后妃皇子女

一、品陀和氣の命 紀は誉田天皇・漢風諡号を応神天皇という応神紀に、産まれるとき 穴、腕の上に生ひたり。其の形、軛の如し。……故、其の名を称へて誉田天皇と謂ふ」とあり、その細注に、上古の時の俗、軛を号ひて褒武田と謂ふ」とある。斯く、軛の如き肉が腕にあつたのでかく名づけたとする。記紀共通の話に即して考えるなら、ホムタはそのような手をホメた名ではなからうか。紀に誉田とあるのも、これが誉手であり、その手を誉めている可能性を暗示していると思われる。

二、輕島の明宮 島は必ずしも海中の島ではなく、秋津島・師木島などと同じく、限られた特定の地域をいう。

三、郎子・郎女について このところの応神の系譜について留意しておきたいことは、ここに某の郎女」という名が頻出し十三人にも及んでいる点である。

ヒコ・ヒメと呼ぶ一方イラツコ・イラツメという。両者の間にはどのような差があるか、前者が尊称とすれば後者は親称に近く、したがって、やや、人間味が漂うのは確かのような差である。万葉集などでも大伴坂上郎女をはじめ多くの女人がイラツメと呼ばれているのにたいし、ヒメは磐姫とか松浦佐用嬪面とかに限られている。この応神の系譜からイラツメが急に多くなったのは、ウチノワキイラツコの話が主題になっているのがきっかけであろう。

四、兄の子と弟の子と云々 兄なる子と弟なると、何れをいいたいと思うか。垂仁の段(一一〇頁)に「孰ニ愛夫与一兄」とあるのと同じいいかた。ウチノワキイラツコという名がすでに若くていとしい子の意であり、この子を王位につけたいとする以下の話は、いうならばこの名のおのずからなる締結を語ろうとするものにほかならない。

五、愴き(心) 心むすばれて晴れぬこと、気づかわしいこと。

○ ひさかたの雨の降る日をただひとり 山辺に居ればいぶせがりけり(万四・七六九)(ひさかたの雨の降る一日を、たった一人山の麓にいと、何ともうつつとしいことだ)

○ 隠りのみ居ればいぶせみ慰むと 出で立ち聞けば来鳴くひぐらし(万八・一四七九)(屋内に引

き籠もつてばかりいるとうとうしいので、気を晴らそうと外に出て立つて聞いていると、来て鳴く
ヒグラシの声よ）
などと万葉に多くつかわれている。

六、葛野を望めて
カヅノは山城国葛野郡（和名抄）一帯をさす。ミサクは遠くを見やること。
と。

○ 味酒 三輪の山 あをによし 奈良の山の 山のまに い隠るまで道の隈 い積もるまでに つばらに
も 見つつ行かむを ししばしも 見放けむ山を 心なく 雲の 隠さぶべしや」(万一・一七)(味酒
三輪山よ、あをによし奈良山の、山と山との間に隠れるまで、いくたびも道を曲がつてゆくまで、し
げしげと見づけて行きたいのに、何度も何度も目をやつて眺めたい山なのに、つれもなく、雲が隠
してよいものであろうか。)などとある。

七、国の秀も見ゆ
国の秀「はやまなどが突き出ているところ。テキスト注六」に 国土のす
ぐれたところ」とあるが、稲の穂があくまで稲の穂であり、すぐれた稲ではないように 国の秀「もす
ぐれた国ではなく、あくまで山などの突き出たのをほめた語である。

八、木幡村
万葉集(一一・二四二五)に 山科の木幡の山を馬はあれど 歩ゆわが来し 汝を
思ひかね(山科の木幡の山を、馬があればいいでしょうけれど、歩いてやって来ました。あなたを思っ
て耐えがたくて。)とある。木幡は今宇治市にぞくするが、大和から近江にかよう道がここを通っ
ていた。またそのへんで伏見の方にも道がわかれていたわけで、この先の美しい女に その道衢に遇へり」
とある。

九、この蟹や何処の蟹
「この蟹」とあるのは、契沖が 是ハ御肴ニ蟹ノ有ケルニ託テカクハヨミ
出デタモノ」といったとおりである。そこからして、今日の食膳に上る、薄く橙色にゆであがった蟹を
連想してはならない。古代人の食した蟹はおもに胥(塩漬)または腊(乾物)であったはずである。

○左に掲げる万葉の長歌(一六・三八八六)が、難波の葦蟹が宮廷に召されるさまをうたっている。
「おしてるや 難波の小江に 廬作り 隠りて居る 葦蟹を 大君召すと 何せむに 我を召すらめ
や 明らけく 我が知ることを 歌人と 我を召すらめや 笛吹きと 我を召すらめや 琴弾きと
我を召すらめや かもかくも 命受けむと 今日今日と 明日香に至り 置くとも 置勿に至り
つかねども 都久野に至り 東の 中の御門ゆ 参り来て 命受くれば 馬にこそ ふもだしかく
もの 牛にこそ 鼻繩著くれ あしひきの この片山の もむ楡を 五百枝剥ぎ垂れ 天照るや 日
の異に干し きびづるや 韓白に搗き 庭に立つ 手白に搗き おしてるや 難波の小江の 初垂を
辛く垂れ来て 陶人の 作れる瓶を 今日行きて 明日取り持ち来 我が目らに 塩塗りたまひ

きたひ
腊はやすも 腊はやすも

右の歌一首は、蟹のために痛みを述べて作りしものなり」

○右歌の訳「おしてるや難波の小江に、家を作つて隠れ住んでいる葦間の蟹を、大君がお召しになるという。何でまた私をお召しになるのか。そんなものでないと私ははつきりと知っているのに。歌唱(うた)いとして私をお召しになるのでしょうか。笛吹きとして私をお召しになるのでしょうか。琴弾きとして私をお召しになるのでしょうか。ともかくも仰せを承ろうと、(今日今日と)明日香に着いて、(置くとも)置勿に着いて(つかねども)都久野に着いて、東の中の御門から伺候してお言葉を承れば、馬にこそは吊り縄をつけるもの、牛にこそは鼻繩をかけるものなのに、(あしひきの)この片山の、もむ榆の木の皮を五百枚も剥いで吊るし、(天照るや)日毎に干して、(さひづるや)韓白で搗き、庭に据えた手臼で搗いて、(おしてるや)難波の小江の塩の初垂りを塩辛く垂らして来て、陶工が作った瓶を今日行つては明日取つて来て、私の目に塩をお塗りになり、その乾肉を賞味なさることよ、その乾肉を賞味なさることよ。

◇右の歌一首は、蟹のために痛みを述べて作ったものである。」

了